

## 永井荷風稿「小説作法」をめぐって

——文学回想ともども——

藤 江 正 通

今にして思えば汗顔の至りなのであるが、若き日、私には小説家になりたという夢を抱いた一時期があった。昭和二十三年六月、大阪の一高校生であった私は、太宰治の玉川上水への投身心中の報をかなりの驚きとともに読み知った。八雲書店版の太宰の全集を一冊、一冊と買い求めて耽読していた頃のことである。当時かなり大きな書店の棚でも、それ程多くの書物が並んでいた訳ではなかった時代であったが、白地に赤の装丁、菊判の太宰の全集本は、ひとときわ鮮やかに私の印象に残った書物であった。現在の私にとって太宰治の著作はさして大きな人生の書ではないが、戦前、戦中、戦後数年の文学史の上での太宰の業績は、やはり特筆すべきものとは思っている。

高校の勉強そのものにあまり興味を抱かなかった私は、その代償というべきであろうか、文芸部とコーラス・グループの活動に力を注いだ。青桐の木が多く育っていた校庭にちなんで、われわれが名づけた Paulownia Chorus の練習も楽しかったが、文芸部の部室は、私の隠処の一つであった。登校はしても嫌いな教師と授業には殆ど出席せず、私はいつも部室で本を読んでいた。鷹揚な高校であったのかも知れぬ

が、年間に数える程しか出席しなかった教科でも不思議と及第点と単位がもらえた。もちろんテストだけは堂々と受け、その準備は自分なりに最高の独学努力をした結果ではあったが——。

文芸部在籍の三年間につき合った友人の中には色々の変り種がいた。靴を全く履かず、朴歯の足駄をつっかけ、廊下を素足で歩いていた同級ながら年長の友人Kは、進駐軍の通訳アルバイトで生活費を稼いでいた。英語の時間などは大てい居眠りをしていたが、教師に指名されると急に立ち上がり、早口の米語のブロークンでペラペラ答え、教師が戸惑う風景は、われわれを大いに喜ばせた。この友人Kは、文芸部の部室に姿を見せるとき、いつも椎名麟三(1911—1973)の著書を小脇にかかえていた。『重き流れのなかに』『深尾正治の手記』そして太宰治の情死した昭和二十三年六月に刊行された書下ろし作品『永遠なる序章』。Kはわれわれの前で、椎名麟三論を滔々とぶちまくった。椎名麟三は程なく赤岩栄による洗礼を受け、キリスト者へと思想的転向を果すが、それ以前の椎名文学の魅力は、私にとっても織田作之助の文学同様、十分に共鳴出来るものをもっていった。要するに戦後徐々

に紹介されはじめたJ・P・サルトルの思想にも通じる実存主義の片鱗を椎名や織田の作品は漂わせていたからでもあったろう。

一方、他の友人Tは土田杏村（1891—1930）の著作に心酔していた。自分の勉強部屋に第一書房刊の『土田杏村全集』全十五巻を揃え、まるで宝物にでも触れるかのような手つきで、そのページを繙いていた。今日、土田杏村の名は全く忘れ去られ、その著作も書店では殆ど目にする事が出来ぬが、生物学を専攻し、のち哲学から国文学の世界に進んだ杏村は、その四十三年の生涯に六十数冊の単行本をはじめ多数の論文、随筆を残している。京大哲学科に入ってから西田幾多郎の影響を受け、「現代哲学序論——認識の現象学的考察」（大正七年）なる卒業論文を提出、以後『国文学の哲学的研究』『象徴の哲学』『社会学原論』『マルキシズム批判』『文学理論』などの力作を次々と生み出した。現在、平凡社の『哲学事典』には「土田杏村」の一項目を留めてはいるが、私にはかの保田与重郎（1910—1981）の場合と同じような特異性をもつ存在として、杏村、与重郎を対比考察する興味を将来に抱いているのである。

いずれにせよ、土田杏村を理解することは高校生にあっては少々困難さがあつたようにも思われる。それでも杏村はTによって部会で度取り上げられ、舌足らずの質疑がおこなわれた記憶がある。

私自身の話題立論の根拠は、一つには津田左右吉であり、一つには『三太郎の日記』の阿部次郎であり、そして厨川白村（1880—1933）の著作であつた。とくに厨川白村の「近代文学十講」「文芸思潮論」

「象牙の塔を出て」「近代の恋愛観」などは、何度読み返したことであろうか。四十年を隔たった今から考えると、なんと古色蒼然たる人名かなと驚かれそうであるが、非難する前に、現代人はこれらの人々の著作を、青春の気持をもって、まじめに読んだことがあるか否かを、まず問うてみたい。

さて高校の文芸部の会合では、各人の創作物の発表と合評が義務づけられていた。朗読したり、ガリ版刷りにしたりした、それぞれの原稿の発表には、容赦ない批判が浴びせられた。同人誌を出している無名の作家に出席してもらつたこともあつた。国語の教師に文学など判るものかという意見が強く、それでも文楽の研究で関西では名を上げつつあつたY先生にだけは、ご出席願つたことも時折あつたようである。

この頃、私は谷崎潤一郎が昭和九年に刊行した『文章読本』をひそかに読んでいた。だがこの書物のことだけは文芸部の部会に持ち出さなく、部会の話題にものぼらぬのを幸いと、他人に知らせぬ虎の巻のような気持で、自分一人だけの愛読書として大切に秘匿していた。

昭和二十三年の話題として是非記して置きたいことが二つある。その第一は、七月に第一巻第一号を発行した日本評論社の雑誌「心」のことである。編輯は生成会であつたが、この生成会同人四十二名の顔触れをみて私は一驚した。高校生として知り得る当代最高の各界の知識碩学、芸術家がズラリと並んでいるではないか。この雑誌だけは毎

号購読しなくては、と心は弾んだ。そして爾後三十三年間、途中、版元は平凡社へと肩代りしたが、昭和五十六年六月の終刊特別号に至るまで、雑誌「心」は私の机上に常に届けられてきたのであった。

因みに今、手許にある雑誌「心」創刊号の目次を次に掲げ、紹介してみよう。

日本的靈性的なるもの

鈴木 大拙

郷愁の松笠

新村 出

美と経済

柳 宗悦

卒業式の辞

安倍 能成

名前

中川 一政

滞欧雑記

武者小路公共

ゴンクウルの『日記』

辰野 隆

そして創作欄には、武者小路実篤、斎藤茂吉、千家元麿、高村光太郎、長与善郎が名をつらね、また当時としては破格と思われる乾山筆菊花図の原色版が、梅原龍三郎の解説で口絵として掲載、本文六十四ページ、定価三十五円の雑誌なのであった。

尚、当時より購読しつづけて来た雑誌には、昭和二十五年一月創刊の新潮社の「芸術新潮」、昭和二十七年三月創刊の音楽之友社の「レコード芸術」があり、文芸誌「新潮」「群像」「文学界」三誌と岩波書店の雑誌「文学」の連続購読とともに、私の血肉に潤沢な栄養を与えつづけてくれたのであった。

話題の第二は、その頃発刊をみた弘文堂のアテネ文庫のことである。文庫本といえ、昭和二年七月に創刊、今年（昭和六十二年）七月に満六十年の歩みを閲した岩波文庫を挙げねばならぬが、残念なことに戦前の岩波文庫を熟知する年令ではなく、戦後、私自身がまず入手したのものとしては、ジェームス・ブライスの『近代民主政治』全四冊、『アミエルの日記』全八冊、『寺田寅彦随筆集』全五冊の記憶が生々しい。とりわけ印象に強く残ったのは、岩波文庫発刊に際して店主の岩波茂雄の名に於いて発表した「読書子に寄す」の文章であった。最近発売の岩波文庫の巻尾にも、この所謂「岩波勸語」は相変らず掲載されているが、小林勇によれば、この発刊の辞は哲学者三木清が草案を作り、岩波茂雄が手を入れた由である。小林は大正末期、円本の全盛期の出版界の機運に乗りおくれた親の岩波書店が、急ぎ昭和二年の二月頃、「岩波文庫」の計画を考え、岩波と小林が三木を頼りとして編集の仕事をしたと書いている。（「人間を書きたい」△三木清△）

昭和二十年九月二十六日、四十八才九ヵ月の生涯を豊多摩拘置所の中で、悲惨な獄死によって閉じた三木清の思想については、多々弁じたいことがあるが、ここでは省略して置こう。

さてアテネ文庫であるが、第一冊を久松真一の『茶の精神』で出版させたこの小冊子シリーズは、いかにも終戦後の日本を象徴するかのとき体裁を備えていた。文庫版六十ページ前後、紙質も悪く、定価は二十五円か三十円であったが、その奥付には岩波文庫発刊の辞ならぬ「アテネ文庫刊行のことば」なるものが印刷されていた。高校生の

私にはそれは実に馴染み易く、理解し易く、三、四冊読んでいるうちに、いつの間にか暗誦出来るようになってしまった。戦争中、教育勅語をはじめ、いくつかの勅語類を暗誦させられた経験が、悲しくもここに役立ったのかも知れない。このアテネ文庫の刊行の辞はなかなか興味深いので、次に全文を書き誌してみよう。

#### アテネ文庫刊行のことば

昔、アテネは方一里にみたない小国であった。しかもその中にプラトン、アリストテレスの哲学を生み、フィデアス、プラクシテレスの芸術を、またソフォクレス、ユウリピデスの悲劇を生んで、人類文化永遠の礎石を置いた。明日の日本もまた、たとい小さく且つ貧しくとも、高き芸術と深き学問とをもって世界に誇る国たらしめねばならぬ。「暮しは低く思いは高く」のワーズワースの詩句のごとく、最低の生活の中にも最高の精神が宿されていなければならぬ。本文庫もまたかかる日本に相応しく、最も簡素なる小冊の中に最も豊かなる生命を充溢せしめんことを念願するものである。切り取られた花瓶にさされた一輪の花が樹上に群る花よりも美しいごとく、また彫刻におけるトルソーが、全身において見出されない肢節のみのもつ部分美を顕現するごとく。

一読、なにか大学の学長の挨拶のようで、当時の日本の社会、人々の生活状況をよく示していると思われた。そこへ追隨者がまた現われ

たのである。昭和二十四年（一九四九）五月三日の日付を入れ、角川源義が精魂を傾けた（？）といわれる署名入りの「角川文庫発刊に際して」なる長文が、文庫本奥付裏に印刷され、店頭に並ぶこととなる。だが正直に言って、もはや私はこの発刊の言葉まで暗記しようとは思わなかった。暗記でもしようものなら、大変な消化不良を起すかも知れないという危機感を抱いたからでもあった。柳田国男、折口信夫の門下生たるを自認し、すぐれた俳人でもあった角川源義が、なぜこのような生硬な文章を許したのか、今もって私は不思議に思っているのである。

高校の三年間は、自由な読書と文芸への気ままな創作、そして甘美な男女共学の歓びとともに、またたくまに過ぎ去っていった。父の書齋にあった天金、金文字、赤レザークロス装の大冊、『鷗外全集』を片端から読んでみたり、坪内逍遙全訳の袖珍版『シェイクスピア全集』を原文と並べて眺めてみたり、小林一郎講述の『経書大講』から儒教の漢籍に親しもうと努力してみたり、そうかと思うと早朝からFENの放送に耳を傾け、学校に行きそびれたりの日常であった。高校三年になっても大学受験などという意識は毛頭なく、それでも申訳程度に旺文社の「傾向と対策」シリーズを二、三冊買い求め、机の上に置いてみたりした。弁護士であった父は、息子が当然、東京大学の法学部に入学するものと独り信じていたようであったし、私自身も来春から東大生か、と思いこむ程の呑気者であった。だが世の情勢はきび

しい。現在の共通一次、足切りに似た「進学適性検査」なるものが当時はあり、この奇妙なテストにある点数以上取らぬと東大には受験出来ぬということを私は知った。この進適なるテストは、クイズを解く場合のように頭の回転が早い者程、有利であった。私は見事、東大から門前払いを喰ってしまった。その頃、私の頭の中には大学と言え、国立の東大か、私立の慶応か、この両者以外の大学は想像すらしていなかった。早稲田は著名な、尊敬すべき学者、芸術家を輩出したことを十分に知りつつも、あれは地方の田舎の人の入学する学校で、頭の上に四角いフツンの薄いのを乗せた大時代の大学帽のイメージは、「あるのであるんであーる」の大隈重信総長のイメージと重なり、古臭さの象徴のように思っていたりした。（これは誠に由々しき偏見と歪曲のイメージであり、後年、私自身の研究と仕事の上で早稲田演劇博物館の河竹繁俊館長をはじめ早稲田出身の学者、芸術家の諸賢に、どれ程お世話になったことであろう。申訳ないことだと思っている。）

さて東大から嫌われた私は、方向転換して独断で慶応の文学部に入學した。そして哲学科の中で私は美学美術史学専攻をためらうことなく選択した。深い理由があった訳でもないが、敬愛する森鷗外がかつて審美学を講義し、阿部次郎が美学を教え、碩学沢木四方吉が美術史学科の基礎を築き、大塚保治、児島喜久雄の東大と双璧の学府であったことを仄聞していたからであった。

慶応の文学部に入学したことを知っても、父は「それは良かった」

と一言述べただけであった。わが道を行くに徹した親子であったからであろう。しかし四年後、大学院の入学式に父は三田の坂を笑顔をもって登ってくれた。そしてその年の七月、父は長逝したのである。

慶応義塾の学生となった私は、塾にゆかりのある学者、芸術家、実業家の業績について次々に触れてゆきたいと考ええるようになった。そして同時に学部、専攻を越えて、当時名声をもった現役の教師たちの教室での授業に全て出席しようと決心した。単位を取るためとか、出席を取るから受講するとかいう馬鹿げた考えなど、ありようはなかったし、又この大学で出席を取られた経験は、私には皆無であった。講義を二、三回拝聴して、低俗だと思ふ授業は完全にボイコットして、他の魅力ある教室に出席したりした。塾には東大教授の現役あるいは名誉教授が多くの講座を開いており、ドイツ文学の相良守峯、倫理学の金子武蔵、美学の竹内敏雄、国文学の久松潜一らの姿が目につかぶ。塾では先生と呼ぶのは創立者の福沢諭吉ただ一人であったから、福沢の著作は社中一同の必読の書であったし、福沢の文章もそれなりに若者をひきつける魅力をもっていた。

慶応に入ってから私がはじめて本格的に読み出した作家の一人は、永井荷風（1879—1959）であった。これといった学歴のない荷風が、明治四十三年四月、森鷗外、上田敏の推薦を受け、慶応の教授に就任し、同時に「三田文学」を主宰して創刊せしめたことを遅時きながら知ったとき、私はえもいわれぬ親近感を荷風に感じはじめた。教授として

の在職期間は、大正五年の二月まで、七年に満たぬものであったが、あの偏奇な晩年を送りつつあった永井荷風が、塾の教壇でフランス文学を講じたとは夢のような話とさえ思ったりした。

高校生時代、春陽堂版の『明治大正文学全集』中の一冊として、永井荷風の作品に接したことはあった。だが現実の花柳界の風俗、人情を知らぬ未成年者に荷風文学の真骨頂は理解されるはずもなかったし、江戸趣味の何たるかも、いわば皮相の会得に終始したにすぎなかった。東京に生まれ、幼時から夏休み全てを毎年のように中野の祖母の許に暮した私ではあったが、大川端は、かのボンボン蒸氣に乗っての見聞に限られるお子様向きの東京理解に留まっていた。しかも終戦をはさむ三、四年間は東京滞在どころではなかった。昭和二十三年の大阪発東京行夜行列車は、相変らず鼻の穴を真黒にした疲れた乗客を東京駅に降ろしていたのである。

慶応の学生となり、荷風文学に耽溺しようとした頃、荷風ゆかりの新橋、柳橋の高級花柳界はもとより、日本語としてもっとも薄汚ない言葉の一つである赤線地帯、青線地帯は営業をつづけていた。吉原なる狭斜の巷、東京でもっとも代表的な私娼窟であった玉の井。「溼東綺譚」の世界は実踏も可能であった。ゼミの学生を引き連れ、吉原を打ち上げの場所とした大先生もおられたし、夜の銀座、新宿、浅草は、それぞれに学生たちの岡場所でもあった。だが荷風文学を本当に味読するには、時代的には江戸、明治、大正、昭和の巾広い振幅をもつ視野と、地理的には東京の横町や裏道を隅々迄散策する興味とともに、

アメリカの風土、フランスの文学、文化、さらには中国の漢籍をも身近なものに出来る該博な知識と教養が是非必要であった。一介の大学生の荷風文学理解など、ほんの取るに足らぬものであったことは言うまでもない。

永井荷風が昭和三十四年四月三十日、市川市八幡町の陋居で孤独の中に急死してから、もはや三十年近くの歳月が流れている。その間には、昭和三十七年末より刊行のものと、昭和四十六年二月より再発行になるものと、二度の全集が、ほぼ完全な形で岩波書店より上梓され、荷風の研究者には必読の書となっている。荷風の最高傑作といわれる日記、「断腸亭日乗」も彼の死の前日までのものが全て収められ、荷風直接の声が、その書簡の集積とともにわれわれに興味深く公開されることとなった。荷風の研究書も吉田精一、秋庭太郎の著書をはじめ夥しい数が出版されているが、さりとてその作品の多くが文庫本化されたり、ベスト・セラーになったりしている訳ではない。このことは幸田露伴の著作についても言えることであるが、最近の書物の読まれ方が、原作が映画化されたり、テレビ・ドラマ化されたり現象とタイアップしていることを考えると、無理のないことと言わざるを得ないであろう。荷風文学の真価を正しく評価する気運が今日現存するのか、あるいは将来に期待出来るのか、それともはや次第に忘れ去られていくのか、私にはよく判らない。単なる郷愁の文学として留まるなら、私は誠に遺憾なことだと思っている。

さて私はここで文人荷風の短篇「小説作法（しょうせつさくほう）」を特に取り上げ、いささかの短評とともに考えてみようと思う。

大正九年二月二十六日、四十二歳の荷風は中期の長篇「おかめ笹」を脱稿と日記にしている。「最終の一章筆進まず。苦心慘澹」した原稿を書き終り、安堵したことであろう。二月二十九日、午後雪解の町を散歩した荷風は、翌三月初の日記に次のように書いている。

朝日本橋第一銀行に赴き、株式払込の用件を弁じ、東洋軒にて食事をなし、八丁堀を過ぎて家に帰る。戯に小説作法なるものを草す。午後春陽堂番頭林氏来りしかばおかめ笹の草稿を与ふ。薄暮窓外雨声を聞く。路地を歩む人再び雪になるべしと語りて過ぐ。

「小説作法」はその四月、春陽堂発行の雑誌「新小説」第二十五年第四巻にかかげられた。原稿枚数にして二十四、五枚程度の小篇ではあるが、執筆には少なくとも数日は要したことであろう。三月九日に春陽堂店員が、おかめ笹の校正摺を持参すところから、あるいはこの時に原稿を渡したのかも知れない。少々気になることは「小説作法」を戯れに草したという荷風の言である。戯れとはどういう意味なのか、私にはよく理解出来ぬが、戯れに葉書にしたためた非常に興味深い例が日記中に見られるので、これを次に掲げてみたい。同じ大正九年八月二十日の記事である。

八月二十日。新聞記者の訪問を避けむとて戯に左の如き文言を葉書にしたゝめ新聞雑誌の各社に送る。

拝啓益々御繁栄の段奉賀候陳者小生今般時代の流行に従ひ原稿生活改造の儀実行致度大略左の如く相定申候間何卒倍旧の御引立に与り度く伏して奉願上候

一新聞雑誌其他文芸の御用向にて御訪問の節は予め金拾円御郵送被下度候さ候へば三個月以内に面晤の時日御通知可申上候尚其節ハ面談料三十分間に付金五円宛申受候

一寄稿御依頼の節ハ長短に係らず前金手付金壹百円御郵送被下度候左候得者三箇年以内に脱稿可仕其節ハ別に一字金壹円宛申受候一小生写真御掲載の節ハ金五拾円申受候

月 日

小説家永井荷風敬白

いまこの文言を読むときさまざまな事柄を考えてしまふ。まず荷風は新聞記者の訪問を嫌っていたこと。そして記者撃退法としてこの葉書をしたためたこと。だがコピー時代でなかった当時のこと、荷風はいつたい何通程の葉書に同文の文言を書きつづけたのだろうか。新聞雑誌の各社というが、なかには除外例もあったことだろう。次にこの前文のいかにも慇懃にしかつ無礼、それでいて売文業者の卑下したような嫌らしい態度の表現はどうであらうか。また面談料とか前金手付

金、そしてそれに伴う具体的な金銭の額面提示。

私はこれを読むと、弁護士のを思い出す。弁護士への法律相談は、意見をきくだけで一時間いくらに相当して鑑定料を支払わねばならぬ。弁護士が事件をはっきり引き受けたとなると、前金としての着手金、手数料を依頼者は応分に支払う。そして事件の終結に当たっては多くの謝金が請求される。裁判に勝ったりすると民事訴訟の場合など、驚ろく程高率の成功謝金を支払わねばならない。小説家がいつ頃からこのような弁護士まがいの金銭報酬の契約をして仕事をしていたのか、残念ながら私には十分の知識がないが、私自身の経験から顧みても、多くの作家たちは実さいには出版社側と出版契約書を取り交わすことをむしろ嫌い、(なかには、君は私を信用しないのか、と怒る著者もいた。もちろんこの契約書は原稿引き渡しの期日を明記しているからでもあったが)戦後かの河出書房倒産事件以後、債権者側がはじめて真剣にこの問題を考え出したと記憶している。いわゆる著作権者と出版社との間には、紳士協定として暗黙裡、つまり形式上の書面によらぬ原稿料、印税率、発行部数などの取り決めがなされ、これが慣行として永くつづけられてきた。現在のような書物の大量生産の時代では実行不可能となり、検印廃止の文字が残されたりするが、かつては書物の一冊一冊の奥付に著作権者の印鑑を押した検印証紙が貼り付けられ、その証紙の数が書物の生産発行部数と一致することで、出版社の良心を示したのであった。それゆえ、著作権者に証紙上に捺印してもらう作業は、編集者の大きな仕事となっていた。(岩波版の『荷風全

集』の奥付には、さすがに「永井」なる朱肉による捺印のある検印証紙が各冊に貼られている。)

さて荷風の葉書の文言の最後には、きわめて興味深い一行が示されている。

#### 一 小生写真御掲載の節は金五拾円申受候

これは現在でいう著作権の延長としての写真肖像権の主張である。

荷風は青年の一時期、短時日ながら正金銀行の行員を経験している(『西遊日誌抄』)が、もともとと非常な合理主義者に生まれついたのであろう、金銭面においての主張は手きびしく、しかも明確であり、また彼の行状そのものも理非曲直を貫ぬく姿勢を守りつづけたようである。安易に自己の写真を使用されたりするのはプライバシーの侵害であり、応分の掲載料を要求するのは当然のことなのだが、それにしてもこの頃の物価はどのようなものであっただろうか。

当時(大正九年)の物価を調べてみると、大工の手間賃が一日あたり二元九十二銭、巡査の初任給が月俸四十五円、大学の授業料は文科系一年分が早稲田大学では七十五円、慶応大学では八十五円、そしてコーヒー一杯が十銭(一円の十分の一)という時代であった。

(週刊朝日編『値段の明治、大正、昭和風俗史』による)

いまコーヒー一杯が仮に三百円とすると、一円は約三千円に相当する。この分で計算すると巡査の初任給は十三万五千円となり、まづまづの妥当額である。そこで荷風の写真を掲載すると約十五万円の料金を支払わねばならぬこととなる。荷風は作家として一字金壹円という



定めを設けようとするが、これはまさに奇想天外な発想ともいうべきであろう。この換算の計算を進めると、ぎっしりと書かれた四百字詰原稿は、一枚なんと約百二十万円という驚ろくべき数字になってしまふ。この葉書を受け取り、まともに読んだ新聞雑誌社側は、腰を抜かさんばかりに驚ろいたことだろうが、同時に「荷風先生の冗談と嫌がらせ」と軽く受けとめた人もいたかも知れない。いずれにせよ「戯に」の二文字はこの場合、非常に重要なキイ・ワードとなることとなり、もし「小説作法」が同じように「戯に」草されたのなら、われわれもそのつもりでこの短篇を読まねばならぬのかも知れぬ。

「小説作法」はその冒頭を次のように書きはじめられている。

一 小説はいかにして作るものなるやどういふ風にして書ものなりやと問はるゝ人屢あり。これほど答へにくき問はなし。

小説の書き方を知りたく思う人は、十中八九、作家志望の気持をもっている人間であろう。そしてそのような気持を抱く者は、なんらかの手段を使って著名な作家や文芸評論家、あるいは直接出版社の編集者に近づく方法を考えようとする。単に近づく機会を得ようとするのなら可愛げがあるが、なかには一方的に自分の作品を送りつけ、これを必ず読むようにと半ば脅迫する投稿者も数多い。事実、荷風が「おのれ曾て井川滋君と三田文学を編輯せし頃青年無名の作家の其の著作

を公にせん事を迫り来れるもの頻々応接に違あらざる程」(小説作法)と書くように、「三田文学」を主宰していた荷風宛には多くの投稿原稿が届けられ、また著名度の高まった荷風個人の許にも、あわよくば自分の原稿を読んでもらおうという下心をもって、来訪する作家志望者も屢々あったことは明白である。

いったい編集者の心理とは誠に奇妙なもので、編集者側から依頼しお願いする原稿には非常な意欲を示すが、それがたとえ高名な作家であれ、作家側から持ち込まれた原稿にはなぜか冷淡になってしまう。もちろんつき合ひのある作家の原稿であるから、無下に断ったりはしないが、なにかその作品を消極的な眼で見たりするのである。文芸出版社への一般投稿などは、一括して封筒のまま部屋の際に積み上げられる運命すらもち、編集者の気まぐれを待つというのがごく常識的なのである。それでいて出版社側の新人賞とか何々賞への応募原稿なら若手の編集者たちを旅館にカン詰にしてまで下読みをさせたりする。その結果、留め置かれた二、三十篇が賞の選者に廻されるのである。荷風は次のように書く。

一 おのれいまだ一度も小説家といふ看板かけた事はなけれど思へば二十年來くだらぬもの書きて売りしより、税務署にては文筆所得の税を取立て、毎年の弁疏も遂に聴入るゝ気色なし。(中略) かうなつては遠慮も無用と先は宗匠家元の心意気にて小説のつくり方いかゞとの愚問に對する愚答筆にまかせて書き出すと雖これ元より具

眼の土に示さんとするものならず。初学の人の手引ともならばなれかし。実をいへば税金を稼ぎいださん窮策なりかし。

文面を素直に読めば、くだらぬものを書いて来た売文業者が、税金対策のために初学者の手引として書く愚答が「小説作法」だということとなるであろう。これらの言葉には大いに自嘲の意がこめられているし、荷風にとって「小説作法」執筆の動機が「戯に」と書き及ぶのも当然であったと思う。だが次々と書き進むにつれ、その内容は「戯に」の域をはるかに越え、古今東西にわたる博学多識の荷風の本領が行間に愈々あらわれ出てくる難解なものに変ってくる。初学者にはもとより、正直に言って私自身にも十分にその内容を理解し得ない文芸理論書が「小説作法」なるものである。いまもしこれを大学の授業の教材に使ったとしたら、教えるものはその註解に甚大な努力を払わねばならぬであろう。私には少々無理かと思ったりする。

大正中期、流行作家であった永井荷風が税務署だけにはかなわぬと書くあたりは、非常に興味深い。現代の売れっ子の推理小説作家が、まるで税金のために次々と作品を書いているようなものだという感想を洩らしたり、ミリオン・セラーを出した女流作家たちが、税務署と華々しく争論するなど、税務署に対する思いは古今を通じて変わらぬものらしい。荷風の場合はさらにもう一つの敵として、彼の著作を度々発禁処分した警視庁の役人をも抱えていた。荷風の人嫌いの性向と金銭感覚の徹底は、これらのことから益々増長したと思われる。

さて永井荷風という人は、学者と芸術家の境目がはっきりしない、良く言えば両者の知識と才能を兼備した人、また悪く言えばどちらの世界にも徹し切れなかった人だと私は思っている。日本の江戸時代から明治にかけてこのようなタイプの大人物は数多く輩出した。大田南畝、頼山陽、広瀬淡窓、そして富岡鉄斎、また森鷗外、夏目漱石、幸田露伴、そして現代の石川淳。これらの人々に共通することは、自己の専門領域に安住することなく、興味ある分野を豊かな語学力を駆使して開拓し、それぞれに他人には追随出来ぬ業績を世に残していったことである。世間ではこのような人たちをディレッタントと呼んだりするが、そう名づけられることをむしろ誇りとするところに、いわゆる文人気質は成り立っている。文人とは、いわば個人の気ままな趣味の世界に、誰からの干渉も受けることなく自由に遊び、自ら楽しむことの出来る人のことである。高度な学問が趣味と混淆し、自然も亦友となし得る風流の境界を、わがものに出来る豊潤な精神の持主である必要もあろう。またディレッタントは、心から尊敬し、敬愛思慕出来る偶像を求めがちである。師として追従はしなかったかも知れぬが、森鷗外にとってゲーテはたしかに偶像の一人であったに違いない。

私は伝記作者という人は、おおむねディレッタント的要素をもっていると思っている。ある特定の人物の生涯にかぎらない興味を抱き、その足跡を綿密に追う実証の仕事などは、よく考えてみれば、よほどのものの好きな行為と言えるのではないか。自叙伝を書く人々には、多少なりとも自己顕示欲があるのは当然であり、ルソーや福沢諭吉など

はその代表と言えようが、他者の評伝の場合は愛着する偶像に自分自身を乗り移らせる程の情熱がないと読者は感動しないであろう。ロマン・ローラン、ストレイチイ、ツヴァイクなどの著作はその好例だと思う。

荷風の最大の偶像は森鷗外であった。鷗外の学識と芸術的才能に心酔した荷風は、まとまった評伝こそ書かなかったが、森先生、鷗外先生と先生づけした鷗外への心の丈を示す短文を数多く残している。一例として昭和十一年筆の「鷗外全集を読む」の全文を次に掲げよう。

一 文学美術の理論に関して疑問の起つた時にはまづ審美綱領と審美新説の二書を読む。

一批評の文など書く時専門の用語がわからない時には以上二書の外に洋画手引草を参照してゐます。

一 小説をかく時、観察の態度をきめやうと思ふ時は雁と灰燼とを読返す。既に二十回くらゐは反復してゐるでせう。

一大正五年初て浜江抽斎の伝を読むまでわたくしは江戸時代の儒家の詩文集にはあまり注意してゐなかつたのであるが、其後は先生の著作中に見えてゐる書巻は一通り読んで置かうと思立つて、写本の手に入らぬものは別として、刊本は今日でも見づりか次第よんで居ります。

一 文学志望の青年で、わたくしの意見をきゝに来る人がゐると、わたくしは自分の説など聞くよりもまづ鷗外全集を一通りよんだ方

がよい。その中で疑義があつたら、それについて説明しやうと、わたくしはいつも答へてをります。

一 文学者にならうと思つたら大学などに入る必要はない。鷗外全集と辞書の言海とを毎日時間をきめて三四年繰返して読めばいゝと思つて居ります。

一 翻訳をする時適当な日本語が考へ出せない時には先生の翻訳と原書とを参照します。上田先生のものも見ます。それでも好い字が無い時には英華辞典で支那語の翻訳を見ます。

一 はんのちよつと心づいたことだけを書いて置きます。

一 読、荷風の鷗外への一辺倒は大変なものだと思ふ。そして鷗外全集を一通り読むことの至難さを現代人として考えざるを得ない。

「小説作法」にもどらう。

文芸の道は天賦の才なくてはかなふべからず、其の才なくして我武者羅に熱中するは迷ひにして自信とは云ひがたかるべし。これ己を知らざる愚の証據なり。

非常に痛烈な極め付け方であるが、たしかに天賦の才というものは、どうしようもない代物だと思ふ。努力することはある成果を果らせるかも知れぬが、天賦の才とはもともと努力以前のものであつて、外部より与えられるのでなく、自己の内側から湧出するのであるから、そ

の才がないと自ら悟ることは本当に惨めなものである。語学の才もその顕著な例である。荷風はこう書く。

鵬外先生若き頃バイロンの詩を訳せらるゝに何の苦もなく漢字を以て韻を押し平仄まで合せられたり。一芸に秀づるものは必ず百芸に通ず。これ一事を究め貫かんと欲すればおのづから関聯して他の事に及ぶが故なり。

他国語を知らぬものは自国語すら知るところがないというゲートの箴言を想い出す。言語に全て基礎を置く人間の歴史、文化を考えると、七十年前の荷風の次の指摘は、今なお傾聴に値する。

小説かゝんと思はゞ何がさて置き一日も早く仏蘭西語を学びたまへ。但し手ほどきは日本人についてなす事禁物なり。暁星学校の夜学にでも行き其の国人についてなすべし。何事も手ほどきが肝腎なり。(中略) 日本人の兎角語学に不得手なるやうに云はるゝは中学校にて日本の教師に英語の手ほどきされるが為なるべし。小学中学の恐るべきはこれだけにても知らるゝなり。

これは大学の教師を六年程経験し、大学で文学評論、フランス語、フランス文学を講じた教育者永井壮吉の語学教育論として読むべきであらう。そして彼自身、二十二才の時、飯田町の暁星学校の夜学でフ

ランス語の初歩を学び、二十四才から二十九才までアメリカ、フランスに暮らした外国語体験者としての意見であることも忘れてはならない。天賦の才に恵まれていたかも知れぬが、二十才を越え、つまり大学生の年令頃に他国語の勉強をはじめた荷風にも、生きた外国語会話におそらく難渋した時期があったものと私は推測している。それは「小学中学の恐るべきはこれだけにても知らるゝなり」の文言に明白である。フランス文学は学問であるが、フランス語そのものは学問ではない。無文字社会の例を引くまでもなく、幼児期は全て無文字の世界である。言葉の習得には教えられることなく、真似ることと馴れることがまず必要である。それは食事をしたり、歯を磨いたりするのと同様、日常生活的な次元の問題となってくる。私の知人の言語学者は青年時、イタリア語を自分の言葉とするために、自宅にイタリア人を下宿させ、寝食を共にする方法をこころみたまへ。日本語を一切使わず、知識から入らず、物真似と反復練習のみであったという。この方法で彼は五、六ヵ国語を短時日に自由に操ることが出来るようになった。もちろん資質の問題もあるが、要は言葉に学問する立場から近づこうとしない態度が実を結んだのであらう。

中学校で日本人の英語の教師が教える英語は、十中八九、英語というものを知識として教え、理解させるといふ方法を取った、学問としての英語である場合が多い。頭の良い生徒は数多くの単語を覚え、文法を理解し、英文の構造を丸暗記する。英語の成績の良い学生とはこのような努力が実った人物と言えよう。原書をすらすらと容易に読み

こなせる能力はすぐれた学者のもつ特権の一つである。それはそこに文字があるからである。文字が存在しなかったら、どうであらうか。われわれは日常会話の場合に文字を思い浮かべながら、しゃべっているだろうか。形容詞や副詞を挿入する順序や位置を考えながら話しているだろうか。言葉、少なくとも生きた言葉とは、理屈以前のものであり、必要だから口から発せられるものなのである。詩は本来口をつき、口よりほとばしる言葉によって構成される。それを文字に移すのは、記号化して残すにすぎず、詩を味うとはその文字を再び言葉として音声化することであり、音楽の一種と考えても差支えないであらう。

大学の教養課程の英語や第二外国語としての他国語は、文字を教えるのか、言葉を教えるのかの二通りの方法をはっきりさせるべきだと思ふ。ことに中学、高校の六年間、全ての学生が学んで来たはずの英語を、今さらリーダーやテキストを使って何を教えようとするのだろうか。高校生の教科書をみると文字としての英語のレベルは、非常に高く、これを頭で理解出来た人たちに大学の語学教師は、むしろ言葉としての英語を教えるべきではなからうか。つまり徹底した会話の授業である。受講者は希望者にのみ限定し、日本語を使わず四年間つづけるのである。一方、文字としての英語はそれぞれの専攻で、原典講読的に内容理解を目的に一年生から四年間学習させる。第二外国語を全ての学生に必修させることなど、私は無意味だと思ふ。他国語に興味を示す学生にのみ、文字と言葉の両面から習得させ、慣れさせるの

である。いわばかつてのバウハウス教育のように、理論としての文字面からの理解と、技術面である言葉の馴致を二方向から教育するのである。そして言葉の教育はその国の出身者が担当するのが理想であることは言うまでもない。

永井荷風が小学、中学の年令を問題にするのは、いたって当然のこととて、語学が嫌いになるような年令では、もはや生きた言葉の習得は無理といわざるを得ないであらう。

さて「小説作法」中のもう一つの項目を挙げて、この稿を閉じよう。

読書思索観察の三事は小説かくものゝ寸毫も怠りてはならぬものなり。読書と思索とは剣術使の毎日道場にて竹刀を持つが如く、観察は武者修行に出で、他流試合をなすが如し。読書思索のみに耽りて世の中間実地の観察を怠るものはやがて古典に捉はれ感情の鋭敏をかくに至るべく、己が才をたのみて実地の観察一点張にて行くものはその人非凡の天才ならぬ限り大抵は行きづまつてしまふものなり。(中略)されば此の三つ兼合ひの使ひ分けむづかし。

剣術使とか武者修行とか、大時代の引用例ではあるが、趣意は誠にもつともだと思ふ。小説家にかぎらず、読書、思索、観察の三項は人間の知の作業として、あらゆる人々に適用出来るであらう。ただ問題はそれぞれの具体的な方法論をどのように検討するかにかかっている。読書を例にとっても、なにを、いかに読むかが示される必要がある。

荷風なら鷗外全集とフランスの近代リアリズムの小説をまず読めと言うであらうが、現代の大学生の読書傾向にそれを充当させることは、まず無理であろう。さすがに大学生ともなると、古典とはどういう書物、名著とはなにかをある程度は理解している。だが彼らが実さいに購読する書物は全く異った種類であることが多い。あなたの愛読書はというアンケートをとったとき、(署名入りなら別の結果が出たかも知れぬが)その書物名の三分の二は私の全く知らぬものが並び、驚いたことがあった。雑高書低という言葉が使われているように、読書の傾向を別方向に導くのは、雑誌の氾濫である。じっくりではなく、ぱらぱらとページを繰る読書の傾向に速読法はさらに輪を掛ける。

思索の時間も短縮されがちである。溢れるような情報の洪水は素早い対処と決断が要求される。キイを押せば必要とする資料がテレビ画面に現われるデータ検索法も着々と実現されつつある。万巻の書物を読み沈思熟慮する時代は終わったのであらうか。

観察のみは人間の行動力を基礎とするので真の人間味を失なわぬ所業かと思っていると、テレビは日本はおろか世界の隅々からの他人の観察記録をたえず各家庭に送り届けてくる。放送大学のテレビ画面を眺めていると、読書、思索、観察を一まとめに四、五十分間にセットしたフル・コースのお料理を食べているような気分になるが、番組が終ったとたん、急にはげしい空腹感をおぼえるのは、なぜなのであらうか。

若き日、ゾラ、モーパッサンの小説世界に心酔し、自然主義に共鳴した永井荷風の精神構造は、八十年間、私の自覚を貫き通した個人主義者のそれであった。そして「小説作法」の主張は、文中にあるように、小説「その価値は唯作者の人格に在りといはゞ一言にして尽くべし。」という結論を出していたのである。

(本学助教授・倫理学)